

俳句入門 その1

俳句を作るための約束事はたくさんあります。でも、最低限守らなければならないのは次の二つだけです。

1. 五・七・五でつくる
2. 季語を一つだけ入れる

そんなことは言われなくても判っている・・！という声が聞こえてきそうですね。では次の作品を見てください。

「江戸川に鴨がたくさんおりました」

季語（鴨）も入っているし、ちゃんと五・七・五になっていますね。でも、これは俳句ではありません。なぜ！？ これを読まれたとき、あなたはどう感じましたか？「ああ、そうですか・・・」というほかはありませんね。この句には感動というものはありません。ただの”報告”です。では、次の句はどうでしょう。

「夕暮れや木の実に響く寺の鐘」

黄昏どきの時を知らせる寺の鐘が木の実に響いている様だった。主観はどこにも感じられない単なる情景描写です。でも、”こんな情景どこかでみたことあるなあ〜”と、連想された方はいないでしょうか。もしこの句から、秋の一点景としての情景を共感してくれる人がいれば、それは立派な俳句なのです。

”感動した情景を、スケッチブックに絵を描くように、ことばで写生する”これが俳句作りの基本です。ただ見たままを写生するのは報告です。驚きや感動、心にひびいた情景をことばに表現するのが俳句なのです。

考えて作らず、感じて作る

幼子たちの素朴なことばや表現に思わず微笑んだり感心させられた経験はどなたにもあるでしょう。子供たちは決して知識に頼んだり理屈で考えたりして話すものではありません。心に湧いた感動を、そして驚きをただ素直にことばにしているだけです。俳諧は三尺の童子にさせよと、いう芭蕉のことばがありますが技巧に走らず誰が見てもわかるように、つまり幼子のような素直な感性こそが、ほんとうに人の心に響くのだということを教えているのです。

作りながら覚える

句を作ろうとする前に、入門書を山ほど買ってきて読み始める方がいます。はっきり言ってそれは間違いです。余計な知識があるとそれに支配されてしまって感性が働かないのです。作りながら、経験を重ねつつ自然に覚えていくのが、上達への一番近道であることを明言します。

季語とは・・・

季感というのは季節を感じさせる雰囲気のこととそれを具体的に補ってくれるのが季語なのです。春・夏・秋・冬というのも季語ですし、一月・二月・・・というのもそうです。明確に季節感が感じられることばなら何でもいいのです。現代では野菜・果物などは温室栽培やバイオ技術で生産されますし、魚なども養殖によって量産されるので昔ながらの季節感が失われつつありますが、本来の自然環境で収穫できる一番美味しいとされるとき、いわゆる旬という時期が俳句では季語として扱われます。歳時記は季語の種類や意味を詳しく調べるのに便利です。その季語を使って作られたサンプルの俳句（例句といいます）なども掲載されているので作句の指針にもなります。出来れば一冊は備えたいですね。買わなくても図書館に行くとあります。

・**自由律俳句**：俳句のジャンルには有季定型の伝統俳句とは全く異なった理念の自由律俳句というのがあります。有季定型の伝統俳句に飽き足らなくなった人たちから派生的に生まれたジャンルで、有名な作家に種田山頭火や尾崎放哉などがいます。一句の中に季語はあっても無くてもよく、また、調子も五・七・五に制約されず全く自由です。約束ごとや制約に縛られずに自由な表現をしたいという思想なのです。まずは、矢張り五七五、季語の基本が大切です。

・字余り・字足らず

一句の字数が五・七・五の17音より多くなること。少なくなること。

例： 雀（すずめ）の子そこのけそこのけお馬が通る 小林 一茶
 兎（うさぎ）も片耳垂る大暑（たいしょ）かな 芥川龍之介

・切れ字

作者の感動をあらわしたり、一句の調子をととのえるときに使われる（や、かな、けり等）。使わなければいけないという決まりはない。切れ字は一句に一つ

・では俳句を作ってみましょう

俳句っていろいろな約束や決まりがあってむずかしそうだなあ、と思っている人がいるかもしれません。そんな人は、まず五・七・五のリズムに言葉をのせることだけ考えればいいのです。なぜかと言うと、このリズムは、ただの言葉をすばらしい詩に変える魔法だからです。次の例を、ちょっと見てください。

例 1：

A みんなでかくれんぼをして遊んだ。じゃんけんで負けたぼく（わたし）が鬼になった。「ひとつ、ふた一つ、み一つつ…」もうみんなかくれてしまって、しーんと静まりかえっている。ぼく（わたし）だけ取り残されたような気がして、なんだかさびしい。ふいに寒くなって、あたりはすっかり冬みたいだ。

B かくれんぼの鬼になって三つかぞえるあいだに、みんなかくれて静かになった。なんだかさびしくて、あたりは冬になったみたい。

C かくれんぼ三つかぞえて冬となる

俳句とはどういう詩でしょうか。ごく簡単にいえば「俳句とは日本の詩歌の伝統を踏まえた緊密な韻律（リズム）を持った短い詩」ということが出来ます。その基本は五、七、五の十七文字（音節）です。

こうした詩を定型詩といいます。日本語はひらがなで表される単位の文字が基本的に一音節ですから、文字と音節が同じように扱われています。

自由律俳句や口語俳句といって、五七五にとらわれない考えもありますが、これは五七五の俳句をしつかりと身につけてから、ご自身で考えられても遅くはないでしょう。

まずは、俳句は五七五を基本にした定型詩と考えておきましょう。

さらに季語（季題）は、俳句の働きを大きく効果的にする重要な役目を持っています。

これにも無季俳句といって季語がなくてもいいという考えもありますが、やはり季語を生かして使うことから始めたいものです。

例 2：

みなさんも毎日の生活の中で、「うれしいなあ」とか「さびしいなあ」とか感じるものがたくさんあるでしょう？俳句は、そうした自分の気持ちを表現するのが大事ですが、ただ、それをそのまま書いてしまうと、かんじんの「うれしさ」や「さびしさ」が、読んだ人には意外と伝わりません。ですから、「うれしいなあ」とか「さびしいなあ」とか説明せずに、ほかの言葉でその気持ちをあらわすことが必要になってきます。ちょっとむずかしい言い方をすれば、ほかの言葉で暗示（あんじ）するということです。

1. さか上がりやっとできたよううれしいな

2. 友だちとさよならをしてさびしいな

ここに二つの俳句がありますが、たとえば、一句目の「うれしいな」を「春の風」に、二句目の「さびしいな」を「秋の風」に変えてみたらどうでしょう。

1. さか上がりやっとできたよ春の風

2. 友だちとさよならをして秋の風

ぼかぼかと気持ちのよい「春の風」に、さか上がりのできたうれしさが感じられませんか？なかよしの友だちにさよならをしたときのさびしさが、「秋の風」から伝わってきませんか？

こんなふうに、自分の気持ちをほかの言葉に置きかえてみると、みなさんの俳句も、今よりもっとすばらしいものになるでしょう。こういうときは、やはり季語が一番役に立ちますが、もちろん、季語以外の言葉でもいいのです。どんな言葉に置きかえたらいいか、ぜひいろいろとくふうしてみてください。

季語は？、五七五の 17 文字か？、口に出した時のリズムは良いか

さあ、今感じた事を 17 文字にまとめてみましょう。

俳句入門 その2

俳句とは、「季語を入れた五・七・五音の短い詩」です。実にシンプルです。

こんなにシンプルなのですから、「私は初心者だから…」などと臆することはありません。まずは気楽に俳句を作ってみましょう。

最初は、上手に作ろうとなどせず、季語（季節の言葉）を入れて、五・七・五の計17音（字）の詩を気軽に詠んで（作って）みます。例を示します。今、寒い冬がやって来たのに、子供たちが、外で元気に缶蹴り遊びをしている様子を見かけたとします。そして、その子供たちの中に、白人の子が混じっていて、ああ、このあたりも国際化が進んだものだと、多少の驚きを覚えたとします。そこで、ごくごく気楽に次のような俳句を詠んでみます。

「白人の子も缶を蹴る寒い冬」（試作①）

この程度の俳句なら、初心者の方でも作れると思いませんか？まずはこの程度の俳句を、肩に力を入れずに、楽な気持ちで作ってみました。

そして、後から推敲によって気楽に作った俳句を、納得いくものに育てていくのです。どんな平凡な俳句も磨けば光る原石です。

では、さっそく推敲に入ります。この俳句で最も気になるのは「寒い冬」の部分です。冬は寒いのが当たり前なので、わざわざ「寒い冬」などと説明する必要はありません。余分な言葉が入ると、俳句が重たくなってしまいます。そこで、歳時記をめぐって、もっと良い季語を探してみます。

歳時記とは、季語を季節ごとにまとめて説明した字引です。俳句を始める人は、これだけは書店で買っておく必要があります。歳時記をめぐっていくと、冬が到来して間もない頃を示す「冬はじめ」という季語が見つかりました。この季語と「寒い冬」という言葉を取り替えます。

「白人の子も缶を蹴る冬はじめ」（試作②）

季語を変えるだけで、グーンと俳句が良くなった気がします。次に、「缶を蹴る」という部分を直していきます。「缶を蹴る」という行為は子供に限らず、機嫌が悪い時の大人もする行為です。やはり「缶蹴り」という表現を用いないと、子供の遊びであることをしっかり伝えられません。そこで、「缶を蹴る」を「缶蹴りす」に改めてみましょう。「缶蹴りす」の「す」は、現代の「する」にあたる古語です。

「白人の子も缶蹴りす冬はじめ」（試作③）

だいぶ良い俳句になってきました。次は「子」という言葉が余分なので削っていきます。「缶蹴り」という語を目にして、子供の遊んでいる姿を想像しない人はいません。ですから、「子」という言葉をわざわざ使う必要はないのです。俳句はわずか17字の短い詩です。余分な言葉は極力省きます。

「白人の混じる缶蹴り冬はじめ」（試作④）

最後の磨きに入ります。「白人」という語ですが、なんだか学術用語のようでかたい感じがしませんか？無邪気な子供たちの遊ぶ光景を詠んだこの俳句には、どうも馴染まない気がします。そこで、「白人」のかわりに「青き眼（め）」という言葉を使ってみます。やわらかい感じがしますし、「青」という色が入ると、俳句から受ける寒い印象が、一層増すような気がするからです。

「青き眼の混じる缶蹴り冬はじめ」

ようやく一句が完成しました。

初心者の方は、上に述べたように、まずは気楽に季語を入れた五・七・五音の俳句を作ります。そして、歳時記などをめぐりながら、その句を推敲によってよりよい俳句へと磨きあげていきます。その繰り返しで、俳句作りの腕が上達していくと思います。

季重ね・季違い（一つの俳句に一つの季語）

俳句は季語を入れて作るものですが、一句に入れる季語の数は一つまでにしておくのが良いとされています。なぜなら、俳句を握り寿司とするならば、季語はネタにあたる最も重要な句の構成要素ですから、むやみやたらに重ねて握ると、食べる側（鑑賞する側）は、どのネタ（季語）に味覚を集中させたらよいのか、わからなくなってしまうからです。

そして何より、それぞれの季語が互いに持ち味を打ち消しあい、一句を台無しにしてしまうこともあるのです。例を見てみましょう。

次の俳句、季語は「新じゃが」（夏の季語）です。

「新じゃがや野風の先の田舎富士」

座五の「田舎富士」は無季の言葉ですが、これを夏の季語「青葉山」と取り替えてみます。

「新じゃがや野風の先の青葉山」

このような、一句に季語が二句以上入った句を「**季重ね**」あるいは「**季重なり**」の俳句と言います。この句を元の句と比べてみると、「新じゃが」という季語の持ついい意味での土臭さが、「青葉」という季語の持つ鮮烈さ、清々しさに負けて、影をひそめてしまっています。また、「青葉」という季語から感じる生き生きとした緑色も、「新じゃが」の持つ土の色と混じり合い、どこか濁ってしまいます。次は「青葉山」を秋の季語「紅葉山」に替えてみます。

「新じゃがや野風の先の紅葉山」

こうなるともう滅茶苦茶です。「季重ね」の俳句の中でも、上のような異なる季節の季語が入ったものは「**季違い**」と言います。この句は、新じゃがの収穫期にあたる初夏の生命力を感じ取るべき句なのか、紅葉が色づく晩秋の趣を感じ取るべき句なのか、全く分からなくなっています。

見てきたとおり、安易な「**季重ね**」・「**季違い**」は、脂の乗ったトロと、程よく酢でしめたコハダを、わざわざ重ねて握って寿司の味を台無しにしてしまう行為と一緒です。初心者は「季重ね」の句、「季違い」の句をできるだけ作らないように、はじめのうちはしっかりと意識した方が良いでしょう。しか

しながら、季重ね・季違いの俳句全てが悪いかというと、実はそうではありません。例は、

■ 季語が互いに生かし合う「季重ね」

次の句は、『おくのほそ道』に収められた松尾芭蕉の

「^{ひとつや}一家に遊女もねたり萩と月」です。

この句は、自らが泊る旅の宿に、遊女も泊っていることに気付いたという設定で詠まれています。 「萩」と「月」という二つの秋の季語が互いを補い合って、なんとも言われぬ良い雰囲気醸し出しています。もしこの句から、「萩」という季語を取り去ってしまうと、「一家に遊女もねたる月夜かな」

これでは、遊女と一つ屋根の下にいる生々しい緊張感ばかりが前面に出てしまい、もとの句の華やぎが褪せてしまいます。今度は、「月」という季語を取り去ってみま「一家に遊女もねたりこぼれ萩」

やはり月が無いと、もとの句の持っていた艶が、ほとんど失せてしまいます。この句のように、二つ以上の季語が、生かし合い、補い合っているような場合は、季重ねは全く気になりません。皆さんも、季語を二つ以上入れることで、俳句の質が明らかに良くなるのなら、鉄の掟のごとく「季語は俳句に一つだけ」のルールを守る事はありません。

■ 強い季語と弱い季語の「季重ね」

まずは次の句を読んでください。

「^{はまぐり}蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ」(芭蕉)

この句は、人々と別れて二見へ旅立とうとする芭蕉が詠んだもので、やはり『おくのほそ道』に収められています。なかなか分かれたがらない蛤の「ふた(蓋)」と「み(身)」が分かたれるように、名残を惜しみながら人々と別れゆくという句意ですが、「蓋・身」と「二見」がかけられている機知に富んだ作品です。この句は、「ゆく秋」という秋の季語と、「蛤」という春の季語が詠まれていますので、いわゆる「季違い」になっています。しかし、この句で季語として働いているのは「ゆく秋」のみであり、「蛤」は季語としては扱われていません。もし、「蛤」が単独で俳句に詠まれたならば、春に句を迎えた肉厚の蛤を季語として詠んだ句となりますが、「ゆく秋」のような強い季語とともに詠まれた場合は、蛤は季語としての性格を放棄します。つまり蛤は、時には季語として働き、時には無季の語としても働く「弱い季語」であると言えます。「強い季語」と「弱い季語」が一句に共存し、季語として働いているのが「強い季語」のみである場合は、季重ね、季違いはあまり気にならないのです。

つい最近発見された次の小林一茶の句も、「雪」という強い冬の季語があることで、「猫の子」という弱い春の季語が、強い季語を支える無季に相当する語としての役割を担うようになっています。

「猫の子が手でおとすなり耳の雪」(一茶)

◎ 以上をまとめると、二つの季語が互いに生かし合っている場合や、強い季語と弱い季語の取り合わせになっているような場合は、「季重ね」「季違い」

も全く問題にならないが、初学の頃は「季重ね」「季違い」の俳句はできるだけ作らないように心掛ける方が良いということになります。最後に、極めて例外的な季重ねの名句を紹介します。初心者はお手本とするより、鑑賞に徹した方がよいと思われる句で「目には青葉山ほととぎすはつ松魚」(素堂)

はつ松魚＝初鯉(はつがつお)。

視覚で青葉、聴覚でホトトギスの声、味覚で初鯉と、全身の感覚を使って初夏を楽しんでいるわけですが、やはり味覚に訴えてくる初鯉が句の中心に座っています。作者の山口素堂は芭蕉とも親交のあった江戸時代前期の俳人です。

「や・かな」「や・けり」を避ける ～切れ字の併用について～

「や」「かな」「けり」の三語は、特に強く詠嘆の意が込められる切れ字の代表格です。

このうち、「や」は上五で、「かな」「けり」は座五(句末)で用いることが多いため、初心者頃は、次のような「や・かな」を併用した俳句、「や・けり」を併用した俳句を作ってしまうがちです。

① 睡蓮^{すいれん}や雨を喜ぶ少女かな

② 木登りやヨットの恋を眺めけり

このような俳句の作り方は、出来るだけ避けましょう。「や」「かな」「けり」は、用いたその直後に余韻を生み出します。俳人は、「や」「かな」「けり」で俳句が切れると、その切れた部分に生じる独特の余韻を楽しむのです。しかし、17字の短い俳句の中に、「や」「かな」「けり」のような強い切れ字が2つもあると、余韻を味わうべき部分が2か所に分散してしまい、結局どちらも満喫できなくなってしまう。しがって、もし上の①②のような俳句が出来上がってしまったら、次の③④のように、「や・かな」「や・けり」の並存しない俳句に直してください。

③ 睡蓮や雨を喜ぶ女の子

④ 木に登りヨットの恋を眺めけり

①②より③④の方がグーンとよくなったでしょう？ところで、「や・かな」の併用された俳句の例は、実際に極めて乏しいのですが、「や・けり」を併用した俳句は全くないわけではありません。例えば、次の名句では「や」と「けり」とが併用されています。

「降る雪や明治は遠くなりけり」(中村草田男)

「や」と「かな」の後に続く余韻が、ともにジワーッと広がるようなものであるのに対し、「けり」の余韻はスーッと消え入るような感じがあるので、「や・かな」ほど「や・けり」は気にならないのかもしれませんが、しかし、「や・けり」の俳句が、草田男の句のような名句になることは極めて稀です。大概是、上の②のような失敗作になります。

初心者の方は、「切れ字がわかった!」という自信が持てるまで、「や・けり」の俳句は避けた方が良いでしょう。何度か読み返してもそれが気にならない場合にのみ、「自分の作品として認めてみましょう」

内海良太

季重ね

此の句ですが「雪山」と「田植歌」二つの季語がありますが
あまり問題にならない程度の季重ねでしょうか

雪山の影してや田植歌

「雪山の影」と「田植歌」の季語の比較ですが、田圃に写っている雪山の影よりも 田植歌が主の季語となります。一寸見ると雪山の文字で、これが主に見えそうですが、矢張り「田植歌」が主となり季語です。

今の俳句で一句の中に複数の季語のあるのをよく見受けますが、この場合どちらの季語に比重があるかを見極めればよいと思います。

つまり どの季語が「主」で もう一つは「従」であると、作るときも どの季語が「主」かを認識してつくればよいでしょう。

例えば、この句を <雪山の裾にひびくや田植歌>にすると、完全に季語が重なります。しかし、原句は「雪山の影」ですから 季語としてやや弱くなります。

「歩く会」の指導は例外も認めた上で、『一句に一季語』で指導してください。その方が焦点がしぼられる ということで

佐々木建成

季語の誤り

「幼少の法然坐像涼しげに」この句の「涼しげに」は「涼し」という季語の代わりにはならない。「涼しげに」は涼しそうだといういみで涼しいとは意味が異なる。「いと涼し」等に変えるべきだ

「うなぎ屋の待ち椅子女ばかり」の句の「うなぎ屋」は季語にはならないので土用鰻に並ぶは女ばかり」とする。

動詞の使い方

「萍の隠沼浮かび上げにけり」

この句は萍が成長して隠沼の表面が上昇したという趣旨の句だと思うが、「浮かび」は自動詞、「上げ」は他動詞であり、この二つの動詞を繋げることは無理がある。従って

「萍の隠沼の面浮かせけり」に整理する

「釣り堀にひと日の余白使ひ果つ」

この句では「使い果つ」が問題。口語では「使ひ果たす」というが「果たす」は他動詞であり「果つ」（果てる）の意味の自動詞には変えられない。「果たす」なら字余りになるので「使い切る」にする。

俳句上達の9つのコツ 井上弘美著から

時間の読み方

俳句は「今」をよむことが基本です。従って一句の中に A という顔の時間と B という今の時間が詠まれている場合は、B を中心に置きます。たとえば、野原で秋の草花を摘んで(A)自宅の花瓶に挿した (B) のような場合、「秋草を野に摘み帰り飾りけり」と詠むのではなく「野に摘みし秋草の束飾りけり」というように「今」に焦点を絞って詠みます。さらに「野に摘みし秋草の束ほどきけり」とすると臨場感がだます。

感慨句は「もの」と組み合わせて詠む

感慨を詠んで成功させる秘訣は、一句の中に見えるものを詠むことです。感慨は心の中の思いなので見えません。そこに時候などの見えない季語を置くと捉えどころのない句になってしまうのです。心情や感慨を詠むときは抽象的な句にならないように具象性をもたせましょう。

余韻をもたせる

芭蕉は「去来抄」の中で「謂ひ応せて何かある。(表現し尽くしてしまつて、何が残るというのだろう)」と言っています。書や日本画で余白を重んじるように、俳句にも余白が必要です。一句の背景や、俳句状況を十七文字に詰め込んで説明すると、意味がわかっても作品としての味わいどころが消えてしまいます。小さな器にほどよく盛って余韻とともに味わってもらうのが俳句と心得ましょう。

飯田隆太 鑑賞歳時記より

自選は作者の大事な力倆の可否が定まらなければそのひとの評価は半減する

好奇心が選句の一番大事なエネルギー。人の作品を選するときの好奇心のもち方は自分自身が実作者であるという意識を捨てること。

歳月の風化を俊たず、眼前ただいまの作品に対し、即座にみずからの裁定をくだし得るところに俳句鑑賞のたのしみがある。

初心の人もベテランの人も心すべきは作品を選んだ瞬間の第一印象を大事にすること。

自分の最初の印象を大事にしながら先輩の意見を参考にする事が鑑賞力を養う

余分の想像をつけ加えないで作品そのものを素直にながめる。これも俳句をたのしむ大事な要件のひとつだろう。

言葉の使い方

×	○	カタカナの乱用	
木漏れ日	木洩れ日	ナマコ壁 サツマイモ サトイモ	海鼠壁
閉ず	閉づ 文語		薩摩芋 里芋
居る いる	ゐる 文語		
昨日 きのう	きのふ 文語		
もみじ	もみぢ 文語		
奏でる かなずる	かなづる 文語		
先ず	先づ 文語		
短かい	短い		
紛ぎれて	紛れて		
道問ふて	道問ひて 文語		
	道問うて ウ音便		

季語の問題 佐々木建成

大南風、南風、黒南風、白南風

歳時記によると南風は夏に吹く南寄りの風を言う。そして強烈な南風を大南風と言います。これは夏全般に適用されます。

これに対して黒南風は梅雨空の時期に吹く南風、白南風は梅雨が明けた後に吹く風です。

青葉雨、青時雨、青葉時雨

歳時記によると、青葉雨は青葉の時に降る雨ですが青時雨、青葉時雨は青葉の頃、雨が上がったあとの木の下を通ると、葉に溜まっていた雫がはらはらと落ちてくることです。

俳句とことば

仁平 勝

いま巧い俳人は誰かと問われたら、私は真つ先に鷹羽狩行の名を挙げる。その既刊句集をすべて収めた『鷹羽狩行俳句集成』（ふらんす堂）が出た。

近頃、いわゆる二句一章（句切れが二か所）で、上五または下五に季語を取り合わせる形が多いが、狩行はそういう安易なパターンをあまり好まない。

たとえば「頼杖に置く春愁」といふ重さ」という句。これを「春愁」と「頼杖」の取り合わせと考えれば即き過ぎだが、そこに「重さ」を加えたところに芸がある。春愁なんて頼杖に置く程度のもので、大して重くないということだ。

または「色鳥の来てふだん着の籠の鳥」。「色鳥」と「籠の鳥」の取り合わせなんて誰も考えない。秋に渡ってくる色鳥はよそ行きで、籠の鳥は「ふだん着」だという発想が心憎い。

「七と三たまに五と会ふ七五三」は、数字だけで七五三の風景を詠んでみせた。七と三は女の子、五は男の子だが、言われてみれば確かに女の子が多い。たんなる言葉

遊びでなく、省略の効いた至芸である。

「山彦とともに遠足めなくなる」は、子供たちのヤッホーという声の山彦がだんだん遠ざかり、遠足の一行も見えなくなった。それだけのことだが、一句は妖怪が子供たちを連れ去ったような幻想を伴う。

今年の四月、小川瀧美子が九十三歳で逝去し、このたび『小川瀧美子全句集』（KADOKAWA）が出た。筆者の好みでいうと、日常的な場面をさりげなく切り取った句がいい。

「法被の子冬日に眠り店の番」は、店番をさせられている子のワンシヨット。冬だから祭の法被でなく、プロ野球の応援グッズだろう。か。「冬日に眠り」という助詞の「に」が秀逸。

「町裏の小路たどりて河豚の鍋」は、河豚屋に着くまでの描写から、直接「河豚の鍋」に移るカットつなぎが絶妙。前句と同様、連用形と名詞止めの結合が、一句に奥行きを生んでいる。

「母の声句碑より伝ふ梅三分」は、下五が季語の取り合わせだが、満開の梅でなく「梅三分」というのがいい。まだ春寒の時期に「母の声」と呼応して、ふと温かさを感じさせてくれるような季語だ。句碑の「母」は中村汀女である。（俳人）

俳句とことば

仁平 勝

季語はしばしば一句の中で他のものとの取り合わせで用いられるが、季語そのものの特徴を詠むほうが、高度な芸が求められる。

鷹羽狩行の第十八句集『十八公』（KADOKAWA）は、相変わらずそうした芸を堪能させてくれる。

「ぼんぼりに灯の入るまでは夕桜は、灯が入れば夜桜になる」ということだ。夕桜を詠みながら、そこに夜桜の像を重ねてみせた。俳句は、場面をどう切り取るかが腕の見せどころだが、この句からは時間の移り変わりも見えてくる。

「遠きほどころかたむく祭笛」は、「祭笛」が主題だが、祭の場面ではない。作者は家にいて、遠くで聞こえる笛の音に心が傾いていく。経験的によくわかる感覚で、祭の新たな情緒の発見ともいえる。

「打水の端を隣と重ねあふ」は、省略の効いた一句で、家の前の道に隣が先に打水しているのがわかる。それが自宅の前に及んでいるので、打水の端を重ねたわけだ。隣家に対する挨拶の心持ちがある。

山田佳乃の第二句集『波』

＊「俳句とことば」「短歌とことば」「詩とことば」（「詩を生きる」に刷新）は次回から土曜夕刊文化面で掲載します。

音」（ふらんす堂）も、季語の特徴をうまく捉えた句が印象に残る。

「片方をいつも探してゐる日永」は、「片方」という曖昧な語がいい。スリッパか靴下かイヤリングか、それを明示しないことで比喩的な効果が生まれる。つまり「日永」には、何か足りない気がするのだ。

「風揚げて一人一人に違ふ空」は、なぜ「違ふ空」なのか。それはめいめいが自分の風を見ているからだ。風揚げとは、空を独占する遊びなのである。

季語の特徴を詠む

深見けん二の第九句集『夕茜』（ふらんす堂）は、季語に臨場感がある。

「日は既に庭に無けれど日脚伸ぶ」の句。たしかに日が伸びたと感じるのは、日が当たらなくなっただけだ。夕方にはまだ暗くならないという感覚が、巧みに表現されている。

「月を見に下りたる庭の虫時雨」は季語が二つある季重なりで、一句の主題が「月」から「虫時雨」に転換する。庭に出なければ、虫の声に気づかなかった。主題の転換は、そのまま作者の心の動きにほかならない。

季重なりが初心者にはタブーなのは、季節感が類型化するからだ。これがうまく使えるようになると、俳句はまた奥が深くなる。

（俳人）

明治の頃、大須賀乙字という俳人がいた。新傾向俳句を提唱し、多数の俳論を発表した。特に季感象徴論、二句一章論が知られている。私の父、源義は乙字の二句一章が俳句のドラマ性を生むことに着目し、この論の実践者として俳誌「河」を創刊した。二句一章とは、相互になんの関連がないものを一句に仕立てることで、新しい世界を現出させる方法論である。これを二物衝撃ともいう。例をあげると、次の私の代表作である。向日葵や信長の首斬り落とす 春樹

【特選】
 激のごと淋しさ積もる湯さめかな
 武田多恵子

△講評▽下五の「湯さめかな」に對して、上五中七の「激のごと淋しさ積もる」との措辞は見事で、俳句歳時記の例句と比較しても全く遜色のない佳吟。いかにも女性らしい繊細な一句。

魂の一行詩

二句一章のドラマ性

角川 春樹

街に出て街の時雨をもちかへる 鈴木涼水

△講評▽街に出た作者が濡れて家に戻ったという句意。中七下五の「街の時雨をもちかへる」の措辞が新鮮。単純にして平明だが、日常の中の細やかなドラマ性のある清涼しい作品。

冬銀河ここにわたしといふ荷物 伊藤実那

△講評▽この句は「明」を「暗」に転換させた乙字の言う「二句一章」の作品。上五の「冬銀河」という美しい景に對して、中七下五の「ここにわたしといふ荷物」は心理的な「暗」である。二物衝撃を実践した佳吟。

【秀選】

傷ひとつなき青空やレノンの忌 玉井玲子

十二月八日ダコタ・ハウスの孤独な灯 中村光正

点滴台連れて霜夜の尿に立つ 越前春生

母を捨てばかんぽかんと大花野 中戸川奈津実

なまはげに悪妻かやと問はれたり 浅井君枝

(毎月一回掲載します)

* 投句募集

はがき1枚に1句、住所、氏名、電話番号明記 〒103・8601郵便(株)日本橋支店留、読売新聞「魂の一行詩」係。メールtamashii@yomiuri.com

「立つ」と「建つ」の違い

なぜなに 日本語

354



イラスト 大高尚

Aさん「丘の上にたつ小さな教会で結婚式を挙げたいな」。Bさん「川のほとりに新しくたつ式場もすてきだよ」。2人の会話に出てくる「たつ」は、漢字ではどう書いたらいいでしょうか。

Aさんの言っている「たつ」は「そこにある」ということで、「立つ」と書きます。建物以外にも「縁日に露店が立つ」「石碑が立つ公園」のように使います。

Bさんがあこがれている式場は建築中、または、建築予定のようです。この意味の「たつ」は「建つ」と書きます。「建造物が建つ」ことを表します。多くの家が並んでいる様子は「立ち並ぶ」ですが、古くなった家を壊して新しくするのは「建て直す」です。

「学校の敷地に仮設住宅が立っている」と、「建築された結果、そこにある」と、とらえて、「建っている」でもいいのでは、という考え方もありますが、新聞では、「現在、そこにある」ことに注目して「立っている」と書くのを原則にしています。

「立つ」は「出かける」意味でも使われます。「出発」から連想して「発つ」と書きたい人もいるかもしれませんが、ただ、「発つ」は常用漢字表にない読みです。「出立」という熟語もあり、紙面では「立つ」を使っています。(関根健一)

「取りたて」か「取れたて」か

なぜなに 日本語

41



イラスト 大高尚

家族でドライブしていたら、道路沿いに野菜の露店が出ているのを見つけた。どれもおいしそうで迷います。看板に書いてあるキャッチフレーズを見たら、1軒は「取りたての野菜」、もう1軒は「取れたての野菜」と、言い方が少し違うのに気がきました。どっちがおいしいのかなあ。

「たて」というのは、何かをした後、それほど時間がたっていないことを表します。「塗りたて」は「塗る」に「たて」が付いて、ペンキなどを塗ってからまだ乾くまでの時間がたっていない様子をいいます。

「取りたて」は、「取る」＋「たて」で、「野菜を取って間もない」＝「取ったばかり」の意味です。「取れたて」は、「取れる」＋「たて」です。「野菜が取れて間もない」＝「取れたばかり」ということを表しています。

「野菜を取った」のか、「野菜が取れた」のか、看板を書いた人の頭の中に最初にどちらが浮かんだかで、言い方が分かれたわけですね。新鮮さに変わりはないでしょう。

なお、「取る」は「採る」とも書きます。新聞では、「キノコ採り」のように採る場合「採る」ですが、育てた野菜や米、果物を収穫するのは「取る」を使っています。(関根健一)

中七 定型リズム生む要

俳句とことば

仁平 勝

季語は上五か下五に来ることが多い。いわば座りがよいからで、そこにさほど苦は要らない。言葉が五七五という定型のリズムを生み出すには、なにより中七が大事になる。

まずは飯田晴の第三句集『ゆめの交り目』（ふらんす堂）を採り上げたい。とくに中七の言葉の運び方が印象に残る。

「夜の葉のかさなりへ打つ盆太鼓」は、盆踊りの場面で「夜の葉」をクロースアップし、その「かさなりへ打つ」というふうに「盆太鼓」につなげた。盆太鼓の響きで

葉が揺れている臨場感が伝わってくる。

「陽炎にみんな入つて遊ぶなり」の中七は、前の句のようにレトリカルではない。「みんな入つて」という素朴な口語調が、楽しげに遊ぶ様子にふさわしい。また「陽炎」も幻想的だ。

「手しごとの指をそろへて眠る冬」は、手仕事を終えて眠りにつくところか。「指をそろへて」という表現に、仕事で疲れた指への労いがある。

堀切克洋句集『尺蠖の道』（文学の森）は三十代の第一句集だが、これも中七に味がある。

「衣擦れの音を名残に雛納」は、納められる雛の「衣擦れ」をピックアップし、「音を名残に」という中七で下五につないでいく。「名残」が雛納めの感情を巧みに表現している。

「車座のはやもいびつに花の宴」

葉がピツタリだ。

「遠足の草のほひの服洗ふ」は、服を洗っているところだが、

「草のほひの」という中七で遠足の場面まで時間が遡っていく。

茨木和生句集『潤』（国書林）

は、著者の第十四句集になる。ここでは、上五から中七への句ま다가りにベテランの芸がある。

「一枚の紙折れば鶴春の雲」は、「春の雲」と折鶴の取り合わせだが、その折鶴を「紙」から「鶴」への変身として仕立てた。「鶴」はまるで、春の空へ飛び立っていくようだ。

「帰るたき家に遺体で戻り寒」

「残されしわれも遺品か春の星」は、奥様を亡くされたときの句だ。ふと呟いたような言葉が、そのまま句またがりだ。五七五のリズムを作り出している。中七の「遺体」「遺品」という言葉に奥行きがある。（俳人）

は、花見の定番といえる車座を、「はやもいびつ」と詠んでみせた。酒の入った宴に「いびつ」という言

一句に絞る

俳句あれこれ 正木ゆう子

俳句の選者は殆どが実作者です。選のみの専門家があまりいないのは、それだけ実作と選は一体ということでしょう。

選には人の句を選ぶ場合と、自分の句を選ぶ自選とがありますが、難しいのは自選の方。誰だつて自分のことはわからないもの。投句するとき、どの句を出そうかと皆さん迷われるでしょうが、その迷いこそ大切。迷いながら選ぶこともひとつのめて、創作なのだと思います。

長年選をしていると、葉書に一句書いて出す人と、インターネットでたくさん出す人では、一句の方がだんぜん入選率の高いことがわかります。数打てば当たるという言葉は、投句には当てはまらないのです。一句に絞る潔さと集中力が、いつのまにかその人の句に重みを与えるのかもしれない。

少ない言葉に思いを込めるのが俳句の要諦だとすれば、句数を絞ることもその中に含まれるということなのです。